

第209号

平成23年11月10日

病院だより



事務部長就任にあたって

Hideo Nakagawa

中川 秀夫

日常診療におけるめまい

Yuutaro Ida

井田裕太郎

安全な輸血を行うために

Shun Andou

安藤 俊

国際親善総合病院

URL <http://shinzen.jp>

〒245-0006 横浜市泉区西が岡 1-28-1
TEL 045 (813) 0221 (代表)
FAX 045 (813) 7419 (庶務課)

国際親善総合病院看護部
モバイルサイト



事務部長就任にあたって

国際親善総合病院ご利用の皆さん、こんにちは。

私は、この10月から事務部長に就任しました中川秀夫です。事務部長の職責の重さに緊張感で一杯の日々を過ごしております。



当院の歴史は古く文久3年（1863年）の設立とされていいますが、「国際親善病院」としては昭和21年に中区相生町で開設され、平成2年に当地に移転開院しました。65年の歴史と伝統を有する病院として、加えて、20診療科をもつ泉区内では最も規模の大きな医療機関として、多くの皆さんから多大な期待・信頼を寄せられています。それは、病院の理念である「良質」「親切」「信頼される」医療の実施に向けて職員一丸となって取り組んでいる姿勢が評価されてきたからだと思います。

しかし、一方で、全国的な傾向である医師の偏在により、一部診療科の医師数の不足により救急対応等でご迷惑をおかけしていること、また、当地に移転してから約20年が経過し、施設の老朽化・狭隘化が進んできており、医療の質、患者サービス向上に懸念が生じてきていること、等から病院の再整備も喫緊の課題とされてきています。

院内では各部門の代表者が集まって、病院の将来像を踏まえた対応策について議論を始めました。住宅街の中にあつて、種々立地上の制約がある中で、動線をいかに効率的にするか、今後の医療需要の動向を踏まえた病院の機能はどうあるべきか等々、議論が白熱しています。

こうした様々な問題に、私は、今までの病院等での実務経験をフルに活用し、この病院が、地域に根ざした医療をさらに充実させていけるように尽力していきたいと考えています。

皆さんのご理解・ご協力をお願いいたします。



日常診療におけるめまい

耳鼻咽喉科において、めまいは耳・鼻・のどの訴えとともに受診件数が多く、ストレスを誘因とする疾患があることや高齢になるにつれ発症しやすいこともあり、最近の社会背景に伴いテレビなどでも特集され、注目される分野です。

ふらつきを含め“めまい”はいわゆる common disease であり、耳鼻科疾患はもちろん脳神経系疾患・循環器疾患・消化器疾患など予後不良な疾患によるものもあり、あらゆる診療科において相関する症状であり、原因の特定が難しい訴えのひとつです。

様々な病院・診療科を受診し、原因不明のままめまい症状に悩まれている方も多いです。一口にめまいと言っても、「天井が回る感じ」「雲の上にいる感じ」など訴えは様々です。めまいはその他の訴え同様、性状・発症様式・罹患期間・随伴症状など問診をしていただくことが重要であり、ある程度の鑑別をすることが可能です。しかしながら、その鑑別は慎重を要するものであり、正しい知識を必要とします。

実際めまいに遭遇した場合、どのような疾患が該当するのか、いかに重症疾患を見極めるのか。また耳鼻科疾患と診断されたとして、どんな疾患なのか、どのような検査・治療をするのか、予防できるのか…など、めまいに対する疑問は多岐にわたると思います。

耳鼻咽喉科で扱うことの多いめまい疾患の一般的な知識とともに、日常診療における経験をもとに実際我々が行っている検査・治療、推奨させていただいている非特異的運動療法などについて説明いたします。皆様のめまいに対する疑問が少しでも解決することができるよう微力ながらお力になれば幸いです。

耳鼻咽喉科 井田 裕太郎

このテーマは

平成23年12月9日(金) 15:00から約1時間

の健康懇話会にて講演予定です。

(入場無料、予約不要、どなたでもご自由にご参加ください。)

中央検査部より

～安全な輸血を行うために～

中央検査部では、輸血に必要な血液型などの検査を中心に、輸血製剤の管理、副作用の管理などの業務を臨床検査技師が安全・迅速に24時間体制で行っています。

①輸血に関わる検査について

輸血の前には様々な検査を行い、患者さんに合う輸血製剤を提供しています。

・血液型検査

輸血に必要なA B O式、R h式血液型を調べます。

・不規則抗体スクリーニング検査

輸血や妊娠などで不規則抗体という抗体が産生された場合、輸血した血液と反応し血液を溶かすことがあります。このような抗体の存在の有無を調べます。

・交差適合試験

輸血を受ける患者さんの血液と、輸血製剤の血液を反応させ、輸血が患者さんと合うかを調べます。

検査は自動機器で検査し、結果は輸血システムでコンピューターと技師に確認され、電子カルテに直接送信し、安全・迅速な結果報告を行っています。

②輸血製剤の管理

輸血製剤の発注・保管は一元管理を行っています。保管は24時間温度記録が可能な保冷庫で行い、品質の確保された製剤を使用しています。

また、患者さんが手術に備え採血された自己血も同様の管理をしています。

③副作用の管理

全輸血の副作用の有無を確認し、副作用が起きた際は原因の調査をしています。

輸血後の感染症対策として、20年間の輸血記録の保管や輸血製剤と感染の因果関係を証明する為の輸血前の血液の保管をしています。

また、輸血後の感染症検査を適切に実施して頂けるように、医師に検査時期のお知らせをしています。

今年は電子カルテと中央検査部輸血システムとの連携を行い、輸血実施の際に患者さんと輸血製剤とのバーコードによる電子照合を可能とし、より安全に輸血を実施できるようになりました。

私たちは患者さんと接する機会は少ないですが、患者さんを陰から見守りつつ、安全な輸血を提供できるように努力していきたく思います。